
浄瑠璃寺吉祥天立像の作風
—鎌倉時代的体勢表現と立体造形にみられる特質について—

建暦2年（1212）頃造立の浄瑠璃寺吉祥天立像の造形については、「天平復古」や「宋風撰取」を論点とした形式面からの研究が蓄積されてきた。その反面、作風面からの検討は少なく、その立体造形の歴史的特徴は系統的に論じられていない。

本発表では、体勢表現の検証から本像の作風に鎌倉時代的要素がみられることを示し、慶派作例との比較を通してその造形的特質を明らかにする。

まず、吉祥天像の体勢表現の変遷を検証する。承暦2年（1078）の法隆寺金堂像、大治5年（1130）の醍醐寺像など、平安時代後期の作例では、安定した静止の姿勢で、側面観では背を丸めた立ち姿を示す。これに対し、嘉禄元年（1225）頃の湛慶作雪蹊寺像は、首・腰・膝を捻る姿勢で、側面観では体軀を弓なりにした立ち姿を示す。浄瑠璃寺像は、体の各所を捻る姿勢で、側面観では体軀がほぼ直立する。このような体の各所を捻る動きのある姿勢や、側面観において体軀が直立または弓なりになる体勢表現は、鎌倉時代吉祥天像にあらわれる新要素とみられる。

同様の体勢表現の変化は、神将像にもみられることが藤岡穰氏によって指摘されており、浄瑠璃寺像の体勢表現は時代性を反映したものとみることができる。

浄瑠璃寺像の作風については、近年、海老原真紀氏により快慶に近いとみる説が提示されている。本発表では慶派の天部像との比較を通して、この問題について検討する。

はじめに、湛慶作の雪蹊寺吉祥天立像との比較を行う。雪蹊寺像は、人体の骨格を意識した肉取り、躍動感のある動勢を表わす。これに対し、浄瑠璃寺像は、顔面は中高の半球状で実人とは隔たり、骨格を感じさせない肉取り、しなやかな動きを表わす。そして豊満だが奥ゆきが浅く、左右への広がり重視する。両像とも大袖を膨らませるが、雪蹊寺像は袖口が歪曲し、底部に奥ゆきがあり、衣文がうねる。建仁2年（1202）の定慶作興福寺梵天立像も、雪蹊寺像と同様の表現を示しており、こうした表現は大袖における慶派的特徴と捉えられよう。これに対し、浄瑠璃寺像は袖口を輪状に整え、底部にも丸みがあり、衣文も浅く整えられ、上記の2作例とは異なる表現を示す。さらに本像の特異な点として、襟元や腕など肉身を露出する範囲が大きい点を指摘したい。

13世紀慶派仏師の作とされる福井県清雲寺の吉祥天立像は、浄瑠璃寺像と服制が酷似する。彫出主体の清雲寺像と比較すると、浄瑠璃寺像の彩色主体の穏やかな作風がより明らかになる。

本像の「生身の女性」を想わせる表現は、慶派作例の人体への歩み寄りとは方向性が異なるように思われる。浄瑠璃寺像は、薄い衣の質感により肉体の膨らみを強調し、肌を大きく見せることで、像になまめかしさを与えている。

浄瑠璃寺像の造立時期は、快慶の晩年にあたる。本像の柔らかな立体造形により全体を穏やかにまとめあげる作風は、線的要素の強調により形式的整齊を追及した快慶晩年期の作風とは異なると考える。